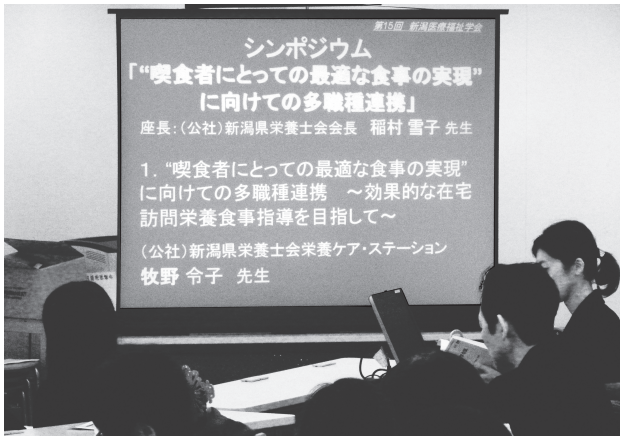
［シンポジウム］“喫食者にとっての最適な食事の実現”に向けての多職種連携

〈シンポジスト１〉

効果的な在宅訪問栄養指導をめざして

公益社団法人　新潟県栄養士会　栄養ケア・ステーション
管理栄養士　牧野　令子

今、高齢者の増加と価値観の多様化への変化すすむなか、可能な限り住み慣れた場所で自分らしくありたいと願う「生活の質」重視の方向に医療と介護体制作りが国を挙げてすすめられようとしている。少しでも早い段階からの健康増進と介護予防が重要であることがクローズアップされ、栄養・身体活動・社会参加の３つが健康寿命の柱であると東京大学　高齢社会総合研究機構でもその方向性を重視した検討が始められている。市町村の包括支援センターと連携し、高齢者が日常生活のなかで少し困り始めて来てはいるが、まだ自立している段階からの適切な助言と支援が有効で、フレイルサイクルの流れを健康的な状態に引き戻す大きな手立てであると期待されている。栄養に係る者として「ご飯がおいしく食べられるための生活習慣の見直し」を出発点とした人の命全体を見据えた栄養ケア活動を展開させ、要支援・要介護への流れを最小限に抑えることに力を注ぐことへの期待は大きい。実際の在宅療養者における管理栄養士の役割は多岐にわたり、様々な慢性疾患・手術後・退院後の食事への対応は個々の生活環境や経済的な事情が幾重にも絡み合い、その対応策は医療施設や介護施設に入院・入居における対応にも増して複雑である。とくにターミナル期の在宅療養とラストワンスプーン（終末期に口にするもの）への配慮は、その人のこれまでの生き方全体への共感から生まれる食への深い想いを、案中模索のなかから探し出す作業となる。在宅訪問ケアの充実を図るために医療と介護の垣根を越えた多職種連携のシステムの構築とその稼働がこれまでよりも更に現実の問題としてクローズアップされて来るのである。１つの命を守るために必要な栄養ケア情報が病院⇔介護施設⇔在宅と途絶えることなく提供され、適切な栄養ケアが行われるよう、まず栄養士間の情報提供網の立ち上げから着手しなければならない。医師を中心とした歯科医師・ケアマネ・看護師・薬剤師・ヘルパーなど多職種連携の在宅訪問支援チームの一員として管理栄養士・栄養士の役割を、責任を持って果たして行く道を目指して行きたい。そのためには個々の管理栄養士・栄養士はそれぞれの立場で栄養管理に関する知識と技術の研鑽に努め、患者とその家族に温かく寄り添い、誠実な対応が出来る人材となることが基本である。対象者の「食に対するこだわり」を大切にし、優先順位の高い課題、療養者・家族（介護者）が直面している課題から、少しずつ整理しながら進めることが先決で、栄養知識だけが独り歩きしないように十分に注意を払いながら在宅療養者・その家族、そして多職種連携スタッフから信頼される管理栄養士を目指していきたい。在宅訪問現場における栄養ケア活動はまだ入り口にあり、保険制度の利用もようやくその糸口を見つけたばかりで、その本格的な稼働までの道のりは遠くに思える。しかしながら、確実にその一歩を踏み出そうとしていることも事実で、決してあきらめたり、投げ出したりすることなく、今、在宅で途方に暮れて、黙って耐えながら待っている人がいることを忘れてはいけないのである。